

研究ノート：尾崎清次と『琉球玩具図譜』について

久 場 政 彦*

The Work of Seiji Ozaki and His Book "Ryukyu Printed Folk Toy's Books"

Masahiko KUBA*

はじめに

尾崎清次（1893～1979）は、神戸市の医師・版画家で、郷土玩具の木版画集『玩具図譜』全5巻の作者として著名である。本稿でとりあげる『琉球玩具図譜』は、『玩具図譜』全5巻の終巻にあたり、尾崎自身が1932年（昭和7）に沖縄を訪れて収集した郷土玩具を基に製作・発行したものである。1936年（昭和12）発行の初版は、55枚の版画を見開きの台紙に1枚ずつ貼付した分冊形式で収めており、右頁にはその解説文が添付されている。この解説文は、「琉球列島の玩具と之に関係した育児上の習俗、信仰、行事等を採録」（序文）した詳細な内容で、昭和初期の沖縄の郷土玩具についてうかがい知ることが出来る数少ない資料である（表1）。

なお、『琉球玩具図譜』の基となった収集品の琉球玩具（張り子、土製品、練り物、木製品）は、日本玩具博物館（井上重義館長）^(注1)が所蔵する尾崎コレクション（尾崎が生前に収集した全国各地の郷土玩具の総称）と、関西沖縄文庫^(注2)の収蔵資料の中に含まれている。これらは、昭和初期に製作された琉球玩具で現存する数少ない貴重な資料である。

昨夏と今春、兵庫・大阪を訪れる機会があり、日本玩具博物館及び関西沖縄文庫において、両館が所蔵する尾崎コレクションの閲覧と関係資料の収集を行うことができた。管見では、尾崎清次と『琉球玩具図譜』について論じた文献・論文は皆無に等しく、関係資料も僅かである。そうした状況の中で、尾崎に関する一定の調査及び資料収集の成果が得られたことは幸運であった。

本稿は、その成果の報告と若干の考察である。

沖縄の郷土玩具

沖縄では郷土玩具を「イーリムン^(注3)」と称し、次の2種類に大別される。1つは、玩具市で大人が子どもに縁起物として買い与える商品玩具で、ハイヌジ（張抜、張り子のこと）等が含まれている。もう1つは、周りにある自然物（木の実、貝殻、木の葉、藁等）を素材とする手作り玩具で、ティンチャマ（手茶目）と呼ばれていた^(注4)。両者のうち、前者を総称して「琉球玩具」という場合が多い。

琉球玩具は、素材の別により、紙や土（焼物）、木（練物を含む）、紙と竹、紙と木、糸と布等に分類できる。中国・日本・東南アジア各地の影響が見られ、日本本土とは異なる独自の題材や彩色が用いられており、全国の郷土玩具愛好家の間でも人気が高い。

かつて、沖縄の郷土玩具の中でも、張り子等の琉球玩具は高価なせいたく品で、庶民が購入することは難しかった。専門の玩具店もなく、1年のうちユッカヌヒー（旧暦5月4日）前後の数日間だけ開設される玩具市で購入するのが通例であった。

ユッカヌヒーになると、那覇市久米の大門前通り（孔子廟前から旧那覇市役所前までの区間）や首里城門前の綾門大道（中山門～守礼門区間）の両側には戸板を仮の台とし、町傘や白布で天幕を張った露店が立ち並び、賑やかな玩具市（イーリムンマチ）を形成した。露店の売り手は女性が多かったが、おそらく玩具製造者の妻や娘たちであったと思われる。

年に1度の販売では生計が成り立たないことは言うまでもない。琉球玩具の製作・販売は専業ではなく、木挽師や陶工といった職人たちの副業として営まれていたのである。

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

尾崎が1932年（昭和7）に調査のため沖縄を訪れたときは、玩具市の露台の上にはブリキ製やセルロイド製の玩具が並び、琉球玩具は片隅に追いやられていた。それでも、尾崎の来訪を待ちかねていたかのように、玩具の製造は細々と続けられていたのである。尾崎は沖縄に滞在中、職人たちを訪ね歩き、膨大な数の琉球玩具と関係資料を収集することができた。その成果が後年、『琉球玩具図譜』として結実することになる。

尾崎清次と郷土玩具

尾崎の生涯については年譜（表2）を参照されたい。ここでは、尾崎と郷土玩具との関わりを中心にして述べることにする。

尾崎清次は、1892年（明治26）2月6日、愛知県西尾市の旧家に長男として生まれた。幼い頃から絵を描くのが好きで将来は画家を志望していたが、家業が医院であったため、医者の道を選択することになった。

1917年（大正6）、京都の医大を卒業後、京都帝大医学部小児科教室に勤務。この時、『玩具図譜』出版の機会を提供する笠原道夫博士と出会う。1921年（大正10）、神戸市技師として神戸市立児童相談所に転勤。さらに翌22年、29歳で関久子（尾崎邦）と結婚する。

同年、二人は和歌山に旅行し、路傍の祠に供えられたおもちゃと遭遇する。郷土玩具との運命的な出会いである。関は次のように述懐している。

「そもそもは神棚に供えてあったおもちゃを、あんなん珍しいわね、と言ったんがはじまりでね。それに尾崎が小児科の医者やったから、医者の立場から、なんで子どものおもちゃと神が結びつくのか、子どもの発達との関係はどうなのか、文化史的な風俗とか習慣とか、医学と結びつくところがあるもんね。」^(注5)。

関の証言によると、尾崎が小児科医の立場から、郷土玩具を含む児童文化全般に興味を抱いていたことが判る。とは言え、尾崎が郷土玩具のもつ素朴なかたちと美の有り様に心を揺さぶられたことも事実であり、関も別の箇所でこう証言している。「和歌山の郊外、田甫の中の誰がまいるともないひっそりとしたお宮の、そのまた傍の小さな祠の中に、赤い

桃を抱いた瓦の猿の群を見付けた時のその感激、六十年を経た今でさえ胸をゆすぶられる思いがします」^(注6)。

ここで吐露された心情は、決して関1人のものではない。後年、郷土玩具の共同研究者として同じ道を共に歩む、まさに最初の一歩がこの瞬間から始まったことをうかがわせる描写である。

この感動的な出会いから間もなく、尾崎は京阪在住の同好者と共に「婢子会」という郷土玩具の研究会を結成する。関西で最初の郷土玩具の研究会であった同会には、尾崎の他に友野祐三郎、筒井英雄、黒田源次、西原豊が参加していた。会の活動は、1924年（大正13）11月から1926年（大正15）8月まで続き、この間『日本土俗玩具集』5編を発行している。

この時期、尾崎は大阪市南の道頓堀南詰にあった郷土玩具店「筒井」の店主で同人の筒井英雄から全国の有名玩具を購入する一方、自ら地元周辺の郷土玩具を収集して歩いた。また、後年の『玩具図譜』につながる「玩具図鑑」（玩具を題材とした木版画集）の製作もこの頃から始めている。

なお、『琉球玩具図譜』初版の凡例には、「今は亡き筒井英雄氏が琉球玩具蒐集に払われた努力も忘れ難い」とあり、尾崎が同人の筒井を介して当時すでに琉球玩具に接していた可能性を示唆している。

1929年（昭和4）1月、笠原小児保健研究所の開設に伴い研究員として勤務。その開所記念として『育児上の縁起に関する玩具図譜』第1巻を出版、翌30年に第2巻、翌31年に第3巻と立て続けに出版している。さらに、29年に朝鮮へ、32年には沖縄へ旅行し、その成果をまとめて34年『朝鮮玩具図譜』、36年『琉球玩具図譜』を上梓した。

1934年（昭和9）、神戸市長田区に小児科医院を開業。38年、16年間連れ添った妻の関と別居する。

戦になると、日中友好協会、日朝協会、日ソ協会の会員となり、京阪神で現代中国美術展の開催に尽力している。1960年（昭和35）から約10年間、自宅に保育所を開園。43年、元看護婦の近藤文恵を養女に迎えている。その文恵の証言によれば、尾崎が郷土玩具を収集していたのは昭和初期までのことで、戦後は収集する様子はなかったという^(注7)。

1969年（昭和44）、眼底出血のため半失明状態となり、病床に伏す日々を経て、1979年（昭和54）7

月18日逝去した。享年87歳。

沖縄調査旅行

尾崎は、『琉球玩具図譜』発行に先立つ1932年（昭和7）、沖縄に約10日間の調査旅行に出かけている。尾崎が調査旅行を行った昭和7年頃の沖縄はどの様な状況だったか。尾崎自身による記録がなく、他の文献資料で類推するしかない。

沖縄では、大正の中頃からブリキ製が、昭和期に入るとセルロイド製の玩具が大量に出回るようになり、琉球玩具は急速に衰退する。尾崎の調査旅行から5年後（昭和12年）の玩具市の様子を伝える新聞記事が残されている。それによると、この頃すでにブリキ製の玩具も廃れ、露台の上にはセルロイド製品が氾濫する有様で、琉球玩具にいたっては露台の片隅でわずか2・3個を見かけるだけであったと伝えている^(注8)。

尾崎の記述にも、沖縄で張り子玩具が盛んに製作されていたのは「今より約30年前迄（明治30年代・筆者注）」とあり、その頃は島袋、輿儀、翁長、岸本、仲里、小橋川、友寄等の諸家が玩具製作に従事していたが、尾崎が来県した時には友寄の一家を残すのみであったと述べている^(注9)。

こうした状況下で、尾崎は膨大な数の琉球玩具と関連情報を収集している^(注10)。収集の合間には、那覇市内の劇場で「王師來朝」を観劇し、“笠を被つて杖を持った男が舞台で踊る姿”を観て、張り子人形にも同形のものがあると感嘆している。

ところで、尾崎が沖縄の旅で収集した玩具の姿と情報の大半は『琉球玩具図譜』に採録されているが、これ以外にも原資料が存在するのではないかという疑問が残る。もし、文字記録や写真等の映像資料が保管されていれば、昭和初期の琉球玩具を取り巻く状況についてうかがい知ることが出来る貴重な資料となる。残念ながら、今回の調査ではこれらの未明資料に関する情報は得られなかった^(注11)。今後の本格的な調査・研究を待たねばならない。

『琉球玩具図譜』発行までの経緯

尾崎は『玩具図譜』第1巻発行と同じ年の夏、朝鮮旅行を行っている。この旅行が後年の『朝鮮玩具図譜』につながる調査旅行であったことは明白であ

る。それにしても、尾崎が朝鮮と同じく、沖縄という言わば当時の日本領土の“辺境”にあたる地域を選んだのはどういう理由からか。版元の笠原は序文の中で「近時南島研究が盛大となり從て此地の風俗慣習言語等の調査報告も數多く（中略）然るに琉球の玩具並に之に関する習俗信仰等を総合的に記載したものに至つては其数甚だ寥々たるものである」と述べており、当時の南島研究の隆盛が琉球（沖縄）に着目した一要因であることを示唆している。

さて、玩具図譜の製作にあたっては、妻の関久子が深く関わっていた。解説文の執筆に必要な参考文献の研究や資料の作成を担当したのは久子であった。玩具図譜に付された引用文献みると、その数の多さに加えて、他分野に亘って涉獵された内容の豊富さに驚嘆させられる。

久子の仕事ぶりは生活面でも大いに發揮された。夫からもらう生活費60円の中から作業場として借りた一間の家賃を払い、そこに「現代木版画の会」同人の摺り師を招いて住まわせていた。さらに、摺り師の食事など身の回りの世話や色刷りの手伝いにまで及んだ。

こうして『琉球玩具図譜』は完成し、100部が刷り上がって関係者に配布された。しかし、大阪空襲で笠原小児研究所が焼け、版木と一緒に配布先リストも焼失したため、その大半は所在がわからなくなってしまった（後年、2部の初版本が県立博物館に、1部が関西沖縄文庫に寄贈された）。

琉球資料の行方

尾崎が生前に収集した膨大な郷土玩具は、現在尾崎コレクションとして日本玩具博物館に収蔵されている。ところが、沖縄での収集品を含む琉球玩具のコレクションは、因縁があって関西沖縄文庫と二分されることになった。この経緯について簡単に触れておきたい。

尾崎が収集した琉球玩具は当初、大阪市大正区にある関西沖縄文庫（主宰・金城馨）に寄贈された。その経緯について触れた新聞記事がある^(注12)。

それによると、戦渦で所在が判らなかつた『琉球玩具図譜』の初版が神戸市で発見され、その所有者である女性が関久子への譲渡を申し出たが、関自身は関西沖縄文庫への寄贈を希望しているという内容

である。結局、このとき図譜と一緒に琉球玩具のコレクションも寄贈されたのであろう。

一方、日本玩具博物館にも尾崎の琉球玩具コレクション（張り子、木製品、土物、練り物）が65点ほど収蔵されているが、その経緯については館長の井上自身の記述に詳しい^(注13)。

井上が尾崎を知ったのは1978年（昭和53）のことである。しかも、このときは尾崎を郷土玩具の収集家として紹介されただけで、『玩具図譜』の著者であることは知らなかった。知人の紹介で尾崎宅を訪問したとき尾崎は病床の身で、収集品のことは話題に上らなかったという。

没後、文恵から『玩具図譜』を譲り受け、初めて尾崎の偉大さに気づかされることになる。後日、文恵の転居にともない、残されていた郷土玩具と書籍を引き取ることになるが、沖縄で収集した琉球玩具はその中に含まれていなかった。

後年、井上は関西沖縄文庫に出向き、双方で協議した結果、尾崎の琉球玩具は一部を除いて文庫側から日本玩具博物館へと移管されることになり、这一件も決着をみることとなった。

『琉球玩具図譜』に見る課題

最後に、『琉球玩具図譜』から読み取れる問題点について触れておきたい。

先ず、最初に明治～昭和初期における琉球玩具の製作地について述べる。

伊波〔1930〕の記述によると、琉球玩具の製作地として、那覇市内の若狭町、湧田の崎、壺屋の3地区が挙げられている。若狭町は古くから諸工業の発達した町で、櫛や塗物（漆器）等の製作が盛んであった。これらに従事する職人たちが副業として郷土玩具を製作したことは先述のとおりである。昭和初期の状況を知る古老の大半が若狭町を琉球玩具の生産地として挙げており、当時から玩具製作の中心地として有名であった。とりわけ、爬竜船や山原船・唐船などの木製玩具は、若狭町の挽物師が一手に引き受けているといふ。

湧田の崎は、ハイヌジ（張り子）の生産地であったが、その種類は人形などに限定されていた。

以上の点を見る限り、琉球玩具の製作は湧田の崎よりも若狭町の方が盛んであったと判断されるが、

昭和初期に発表された文献や論文等が琉球玩具製作の中心地として指摘するのは湧田の崎の方である。玩具図譜の解説でも、明治から昭和初期にかけて琉球玩具製作に従事していた友寄という一族のことがたびたび登場するが、彼等の居住地は湧田の崎である。湧田は、古くは那覇市の四町（西町、東町、若狭町、泉崎町）の1つで、現在の那覇市泉崎1丁目の辺りにあった。1682年に壺屋町に窯業が統合されるまでの65年間、湧田焼の生産地として知られており、その後も明治期から大正・昭和初期に至るまで沖縄県庁や県立図書館などが建ち並ぶ那覇市の中心地であった。

湧田の崎に関する資料は限られており、不明な点が多い。かつて湧田の崎にはサバツクヤー（草履作り職人）が多く居住していたので、周辺住民はこの付近を“湧田サバカチ（草履編み）”と呼んでいたという記録もある^(注14)。これらの職人たちが、副業として年に一度、琉球玩具を製作していたことは想像に難くない。

その他、漁師や遊女の形、家などの焼物に彩色した土製玩具については、壺屋に居住する陶工が製作していたことが知られている。尾崎の収集品の中にも、「カマニー（窯側）」の屋号をもつ高江洲某の作品が含まれている。“カマニー”は、壺屋の“七チネー”に属する名家である（七チネーとは、壺屋創設当時、首里王府から屋敷を拝領した家族のことで、陶工として由緒ある家柄である）。このことから、壺屋では陶工の多くが土製玩具の製作に従事していたことがうかがえる。

以上の諸点をふまえて、琉球玩具の製作地についてまとめる、以下の区分が可能である。

- 若狭町：木製玩具・張り子玩具の製作地
- 湧田の崎：張り子玩具（人形）の製作地
- 壺屋：土製品（焼物・練り物）の製作地

今後はこれらの区分を裏付ける資料の収集だけでなく、他地域における玩具製作の可能性も併せて調査を進めていくべきであろう。

さて、昭和初期の琉球玩具（商品玩具）を考えるときに忘れてならないのが矢賀商店の存在である。尾崎コレクション中にも、沖縄での収集品だけではなく、東京の矢賀商店が製作・販売した琉球張り子が数点含まれている。矢賀商店は、1930年代まで琉球

玩具を販売していた会社で、東京の浅草田中町と神田区鍛冶町に店舗をかまえていた。ただし、商店発行のパンフレットをみると「沖縄物産一手販売」の表記があり、玩具以外の物産も手がけていた可能性がある。

1935年頃の商店玩具目録が残されているが、その中に記載されている商品は、張紙（張り子）44種、練物29種、土玩具13種、木彫11種、アダン葉玩具12種、その他13種と多様である。矢賀製の琉球張り子は独特な光沢と彩色で、県外向けに新型の張り子も製作しており、人気が高かった^(注15)。今回の調査で張り子の底部を確認したところ、2種類の商標シールが貼られており、1つには「那覇市若狭町1-266、製造元、矢賀宗友」、もう一方には「東京市浅草田中町72、販売部、矢賀商店」と印刷されていた。上記の内容を素直に解釈すれば、矢賀商店は沖縄で商品を製造し、東京の直営店で販売する仕組みであったということになる。

ところで、矢賀という名字は沖縄で聞き慣れないが、いかなる素性の者だろうか。伊波の論考に、渋沢敬三のアチックミュージアムには浅草田中町の屋嘉宗友の製作した琉球玩具が収蔵されていると述べている箇所がある^(注16)。住所と名前が一致するので、屋嘉と矢賀が同一人物であることは間違いない。あるいは、東京進出に際して他県人に馴染みやすい矢賀姓に改めたのだろうか。もし屋嘉が本名であれば、素性の解明も不可能ではない^(注17)。

ともあれ、郷土玩具が衰退する昭和初期に、これだけの市場展開を為し得たことは注目に値することと言えよう。

さいごに

尾崎清次と『琉球玩具図譜』の研究はやっと端緒についてばかりである。尾崎の収集した琉球資料（琉球玩具と文字記録、書籍等）が沖縄の郷土玩具研究において第一級の資料となることは言うまでもない。今後、尾崎の評価が高まり、研究が進展することを期待するものである。

本稿は尾崎と玩具図譜に関する予備的考察であるが、多くの課題を見いだすことができた。今後の本格的な調査・研究に活かしたい。なお、尾崎の沖縄旅行に関する資料については、現在も調査を継続し

ている。徒労に終わるかも知れないが、資料的価値の重要性をつねに念頭に置きながら、粘り強く調査していきたと思う。

今回の調査は、準備不足が否めなかった。そうした中で、日本玩具博物館の井上重義館長と尾崎織女学芸員、関西沖縄文庫の金城馨氏にはご協力いただき、大変お世話になった。また、『琉文手帖』主宰の新城栄徳氏には本稿に関して多くのご教示をいただいた。文面を借りて厚く感謝申し上げる。

追記

今回の調査と並行して、関西地区で沖縄の郷土玩具を所蔵していると思われる博物館を選定して問い合わせたところ、以下の結果が得られた。

- (1) 国立民族学博物館には、アチック・ミュージアムから移管された昭和初期の琉球張り子が6点ほど登録されているが、これ以外にも中国の張り子として分類された収蔵資料の中に琉球張り子と思われる物品が数点確認されたことから今後の調査で収蔵数が増える可能性はある。
- (2) 京都文化博物館には、朏健之助コレクションの中に琉球玩具が65点（張り子、土人形、船模型、藁人形他）含まれている。
- (3) 天理大学付属天理参考館には、張り子人形だけで5～6点が収蔵されている。

また、東京国立博物館には、1884年（明治17）ごろ収集された最古の琉球玩具が36点収蔵されている。張り子については、ある程度の剥落は否めないものの、保存状態は概ね良好である。なお、本資料は1999年度（平成11）に修理を実施している。

その他、日本全国には相当数の琉球玩具コレクションが存在すると思われるが、これまで実態を把握するための調査が実施されたことはない。今後の進展が望まれる。

表1 『琉球玩具図譜』全頁内容一覧

圖	名 称	種 别	方 言 名	解説の重要事項
1	人形1	張子	ジュリグワーニンジョウ	
2	人形2	張子	ジュリグワーニンジョウ	友寄隆和作(昭和2・3年頃の作品)
3	ズリ馬人形	張子	ジュリグワーニンジョウ	
4	男女踊人形	張子	ジュリグワーニンジョウ	
5	笠踊り	張子		
6	馬乗り1	張子	チンチンウマグワー	伊波普猷「琉球の戯曲に現れた玩具」(昭和5)
7	馬乗り2	張子	チンチンウマグワー	
8	馬乗り3	張子	チンチンウマグワー	友寄隆和作(昭和7年製)
9	獅子	張子	シーシグワー	琉球特有の彩色法
10	獅子舞	張子	シシメーサー	
11	猿1	張子	サルグワー	
12	猿2	張子	サルグワー	「猿の這った形で、琉球独自のもの」
13	犬	張子	イングワー	
14	牛	張子	ウシグワー	
15	牛	張子	ウシグワー	
16	馬	張子	ウマグワー	
17	兎	張子	ウサジグワー	琉球張り子の製作法を記す
18	猫	張子	マヤーグワー	「今より約30年前迄は湧田の崎といふ邊で盛に作られ、島袋、與儀、翁長、岸本、仲里、小橋川、友寄等の諸家があつて(中略)今は友寄の一家を残すのみで他は殆どその製作を絶つに至った」
19	鳩	張子	ホートウグワー	
20	闘鶏	張子	タウチオーラセー	
21	起上り小法師	張子	ウッチリクブサー	友寄隆和作 ※昭和5年に60余歳で没
22	櫂	木	イエーク	昭和7年の玩具市で売られたもの
23	漁夫	土		壺屋の窯側(カマンニー)高江洲作(昭和7年製)
24	釣人	土		ユッカヌヒーに売られたもの
25	釣人	土		
26	馬	土		小児の邪氣を祓う(壺屋製)
27	家	土		ユッカヌヒーに売られたもの(壺屋製)
28	壺	土		京都伏見焼のデンボと類似
29	爬龍船	木	ハーリーブニ	伊波普猷「琉球古今記」6頁(大正15)
30	船	木		
31	矢筈	竹・紙	ヤカジ	
36	ガラガラ	張子		土製のものは壺屋から製出
39	假面	張子	猿のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)
40	假面	張子	天狗のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)。この木型の原作者は友寄隆裕氏。明治35年66歳で没。
41	假面	張子	鬼のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)
42	假面	張子	怪鬼のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)
44	廻	紙・竹	マッタクー	
45	廻	紙・竹	カーブヤー	
46	風弾	紙・竹	フウタン	(注59)宮里良保「胡蝶廻」『科學畫報』(T 14. 11)

※47~55は、アダン葉製の笛・風車・指輪・籠・草履、クバ葉製の虫かご・鎖、木製の独楽など

表2 尾崎清次 年譜

年号	西暦	事柄
明治26	1893	2月6日、愛知県西尾市花蔵寺町五貫東25にて地主の総領（跡取り）として出生。 家業は医院。
明治36	1903	愛知日室小学校卒業
明治39	1906	愛知県西尾尋常高等小学校3年終了
明治44	1911	愛知県立第二中学校（現県立岡崎高等学校）卒業
大正4	1915	京都府立医科大学入学
大正6	1917	同校卒業。京都帝国大学医学部小児科教室勤務。笠原道夫博士に師事。
大正10	1921	神戸市技士として神戸市立児童相談所勤務
大正11	1922	関久子（尾崎邦）と結婚
大正12	1923	和歌山の郊外、田圃の中にあった小さな祠の中に、赤い桃を抱いた瓦の猿の置物を見て、玩具に興味を抱く
大正13	1924	婢子会の活動に参加（同年11月～大正15年8月） 筒井英雄（大阪市南の道頓堀南詰にあった郷土玩具店「筒井」の店主） から全国の有名玩具を購入する一方で、自ら地域周辺の郷土玩具を収集
昭和4	1929	大阪市立笠原小児保健研究所（同年1月開所）研究員として勤務。 開所記念出版として『玩具図譜』製作に着手。 『育児上の縁起に関する玩具図譜』第1巻刊行 夏に朝鮮旅行（10日程度）
昭和5	1930	『育児上の縁起に関する玩具図譜』第2巻刊行
昭和6	1931	『育児上の縁起に関する玩具図譜』第3巻刊行
昭和7	1932	沖縄旅行（10日程度）
昭和9	1934	神戸市長田区五位池町1-1-3に小児科医院開業 『朝鮮玩具図譜』第4巻刊行
昭和11	1936	『琉球玩具図譜』第5巻刊行
昭和13	1938	関久子（尾崎邦）と別居
昭和20	1945	大阪空襲で笠原小児研究所が全焼。玩具図譜の関係資料も焼失。
昭和22	1947	日中友好協会、日朝協会、日ソ協会の会員となる 戦後は中国人画家・李平凡と交流。李の帰国（1950年5月）後は、中国と日本版画運動協会とのパイプ役となり、中国木刻展の開催に尽力。この間、中国木刻に関する論文を日中友好誌に発表。
昭和24	1949	京阪神で現代中国美術展を開催（～昭和38）
昭和35	1960	自宅で保育所「愛児園」を開園（～昭和44）
昭和43	1968	近藤文恵を養女とする（尾崎文恵）
昭和44	1969	眼底出血のため半失明状態となる
昭和52	1977	井上重義氏（日本玩具博物館館長）の訪問をうける
昭和54	1979	7月18日、死去（享年87歳）

脚注

- 注1. 日本玩具博物館：兵庫県神崎郡香寺町中仁野町671-3, 1974年（昭和49）、井上重義氏によって設立された。140カ国の玩具や人形など、総数8万点を越える資料を収蔵。わが国を代表する玩具博物館である。
- 注2. 関西沖縄文庫：大阪府大阪市大正区小林東3-13-20, 主宰の金城馨氏が自宅に私設文庫を開いたのが始まり。1986年（昭和61）、大正区に移転。沖縄関連のイベントや情報の発信拠点として精力的に活動している。
- 注3. 伊波普猷は「玩具を意味する琉球語のyiri-munは、貴ひ物の義から転じたものである」と自説を述べている〔1930〕。大城精徳は、日本の古語「いらう（弄う）=もてあそぶ」と「もの」が合体して「いらうもの（弄う物）」、つまり方言の「イーリムン」になったと主張している〔1974〕。
- 注4. 大城〔1974〕
- 注5. 西浦・関〔1994〕
- 注6. 尾崎邦（関久子）「御札に代えて」『玩具図譜』第5巻（村田書店, 1983復刻）
- 注7. 井上〔1988〕
- 注8. 沖縄日報〔1937〕
「マーケット前から東町裏通りにはきのふから早くも玩具市が立つた。大きな日傘の下にいかにも勝気らしい顔をした小母さん方が、毎度馴染の露店を並べて子供づれのおかみさんたちを引きつけてゐるが、臺の上にはセルロイド製品の氾濫だ。郷土玩具を滅ぼしたブリキ製品も、セルロイドに仇を討たれた形である。
- は龍小、櫂小、お前箱の二つ三つをとある露店の片隅でやつと見つけ出した。昔なつかしい『島物』はこういふはかない身の上となつてゐるのだ」
- 注9. 尾崎〔1936〕
- 注10. 尾崎コレクションに含まれる琉球玩具の底部や裏側には「昭和7年・那覇」の墨書きがあり、間違いなく現地で購入したことが判る。
- 注11. 尾崎の養女であった文恵が遺品を管理していた可能性は大きいが、残念なことに本人はすでに故人となり、神戸市灘区の麻耶山天上寺に縁故者もなく葬られている。一方、妻の関久子も同様な

境遇で親族はなく、晩年を知る関係者の多くは高齢のため証言が得られなかった。

- 注12. 沖縄タイムス〔1986〕に次の記事がある。
「同著は百冊発行したが、戦災で失い、神戸市の公庄れいさん（53）がただ一冊保存している。公庄さんの申し出もあるので、近く主人の本を大正区の沖縄文庫（私設）に寄贈し、みんなで手づくりのがんぐを作つてみたい」。

- 注13. 井上〔1988〕の説明は以下の通りである。
「内海（繁）先生などからの助言もあったようで、玩具関係は当館にという話が進みはじめた。しかし神戸で先生の記念館を作るといった話も出始め、重複したものなど一部が入っただけであったが、五位の池の家が老朽化し転居されることになり、残っていた郷土玩具や、郷土玩具に関する文献などを今春引き取ったのである。

ただ先生の収集品を全て引き取ったわけではなく、琉球関係の大部分は大阪の琉球関係の資料館に行っている（後略）」

- 注14. 那覇市〔1979〕

- 注15. 山中〔1955〕の以下の指摘はそのことを物語っている。

「張子玩具は、主として那覇の湧田で製作されていたが、それ以上に東京浅草で芳賀という人が大量に製作していた」

- 注16. 伊波（前掲）

- 注17. 家名が「屋嘉」で名乗頭に「宗」の一字を用いるのは「岑（しん）氏」である。沖縄本島の名護市と那覇市に多い。辞典〔1992〕によると、「岑氏の祖大城筑登之はもと奈良の住人で、橋本休右衛門宗次といい、嘉靖年間に来琉し那覇東村に住んで家来赤頭となり、二世宗休は1674年に金武間切屋嘉地頭職に任じられた」とある。

引用文献

井上重義「尾崎清次先生のこと」『日本玩具博物館

館報・おもちゃと遊び』No.8 (1988年9月15日号)

所収

伊波普猷「琉球の戯曲に現れた玩具」『旅と伝説』

3巻4号(1930年)『伊波普猷全集』第9巻(平凡社)所収

大城精徳「イーリムン(玩具)とティンチャマ(玩具づくり)のこと」『琉球の文化』第3号(琉球文化社、1973年)所収

沖縄県姓氏家系大辞典編集委員会『沖縄県姓氏家系大辞典』(角川書店、1992年)

沖縄タイムス「喫茶室—沖縄通の反戦おばあさん—」
(1986年12月4日付)

沖縄日報「懐しの玩具市“四日の日”近づいて東町
に露店居並ぶ」(1937年6月20日付)

尾崎清次『琉球玩具図譜』(笠原小児保健研究所
1936年)

〃『玩具図譜』第5巻(村田書店、1983年復刻)

個人史をきく会『86才元気印やってます—関久子の
歩みー』(フリーケ、1987年)

那覇市『那覇市史—那覇の民俗—』資料篇第2巻中
の7(那覇市企画部市史編集室、1979年)

西浦宏己・関久子(監)『琉球の玩具とむかし遊び—
沖縄伝統文化を継承する人々—』(新泉社、1994
年)

中山登『郷土玩具—沖縄・中国・台湾・韓国—』
(誠文堂新光社、1955年)